



【9】近代4(昭和初期)…⑮東洋一 ⑯平和博

1 百万都市

大都市を目指して明治、大正と駆け抜けてきた名古屋市。大正10年の大合併で、人口では京都市を追い抜き、東京市、大阪市に次ぐ大都市になりました。

昭和2年、市長に大岩勇夫が就くと、不景気な中で懸案となっていた事業を推進しました。そしてその完成を祝って、昭和大恐慌の最中の5年に、人口100万人突破の記念大会を計画したのです。残念ながら、その年の国勢調査では100万人は越えられませんでした。5年後の調査では、堂々と108万人になっています。ついに名古屋は、当時世界でも数少ない百万都市になったのです。

大岩市政は、その名古屋を、世界へと押し上げるようなプロジェクトを次々に推進していきました。

今回は、このように昭和初期の名古屋を彩った、大岩市長の市政を追ってみたいと思います。

2 大岩市長の仕事

(1) 東洋一：世界が視野のプロジェクト

昭和2年、前市長の退陣を受けて、新市長に、市会議長だった大岩勇夫が推されました。氏は、3年の御大典奉祝博覧会を成功させると、5年には懸案になっていた四大プロジェ

昭和	業 績	備 考
3年	御大典奉祝名古屋博覧会	鶴舞公園、194万人
5年	市営バスの運行	
同	公会堂竣工	④ 鶴舞公園
同	上水配水塔竣工	④ 上野
同	下水処理場竣工	④ 熱田、堀留
同	中川運河竣工	④ 7年全通、東洋一
同	「中京デトロイト構想」提唱	自動車産業育成
6年	市民病院開設	桜山
7年	国産自動車「アツタ号」完成	国産初
8年	振甫プール竣工	池下、前畑：世界記録
同	市役所新庁舎竣工	現庁舎
10年	東山公園開園	
12年	東山植物園、動物園 開園	東洋一
同	桜通竣工	大津通迄
同	汎太平洋平和博覧会	初の国際博、480万人

(注) ④は、四大プロジェクトとされたもの

図1 大岩市長が手掛けた主な仕事。
今日も残るプロジェクトが並ぶ

クトを竣工させました(図1)。同時に、東京、大阪と並ぶためには重工業の育成が不可欠と、未だ量産されていなかった自動車に目を付けました。これは「中京デトロイト構想」と呼ばれ、7年には国産初の乗用車とされるアツタ号を完成させています。このように大岩市長の仕事は実に多様です。ここでは、その中でも今日も大きな遺産となっている2つのプロジェクトをみてみましょう。

一つは、中川運河です。大正の都市計画で、名古屋は五大運河を計画しました。その中でも最も重要なのが、名古屋駅と名古屋港を結ぶ中川運河でした。当時、名古屋には、石川栄耀という都市計画の専門家がいて、運河を区画整理でつくることにしたのです。この計画は運河築造だけではなく、掘った土で周囲を工場地域として開発しようという画期的なものでした(図2)。そのうえ、潮汐から水面を一定に保つために閘門を設け、パナマ運河のような形としたのです。それが、「東洋一」と呼ばれたのでしょう。

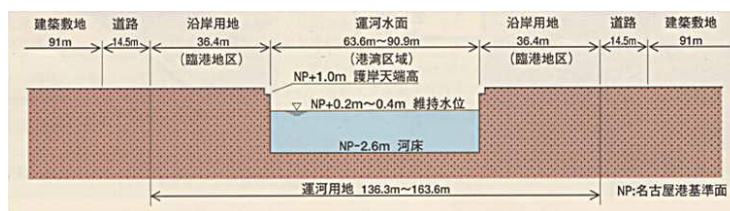


図2 中川運河の断面図。
運河道路のさらに外側に工場等の建築敷地が用意された

いま一つが東山公園です。鶴舞にあった市営の動物園が手狭になり、何とかしたいと担当者が頼みました。すると市長は、「ただの土地を探してこい」と答えたといいます。今日からみれば不可能に思えることですが、当時の名古屋は50以上もある区画整理組合が土地の付加価値を高めるための競争をしていたのです。森林公園に都市計画決定されていた田代土地区画整理組合が応えました。大地主の組合長が公園の大半を寄付し、組合も土

地や幹線道路用地等を提供したのです。

これに応じて、市も動物園は、ドイツの先進例に習い、ライオン等の猛獣にも柵のない放養方式を採用しました。東洋で初めてでした。一方植物園は、温室をロンドン万博の目玉だった水晶宮に倣ったものとしたのです(図3)。これも東洋に例のないものになりました。



図3 植物園の目玉。「水晶宮」と呼ばれた温室。
実際は、英国「パームハウス」がモデル

24万坪を持つ東山公園が、昭和10年に開園。その中に12年、動物園と植物園もオープンしました。市は併せて公園前まで市電を

敷設したため、田代組合の地価は何倍にも跳ね上がり、その売れ行きも良好だったといえます。

中川運河、東山公園。この二つのプロジェクトに共通するものは区画整理です。区画整理は買収

なしに公共用地を生み出すことができます。また施設設置には各組合の誘致競争を生かすことができたのです。不況の時代でもプロジェクトを動かせたのは、このためだったのでしょう。そしてその頃、もう一つの東洋一ができてつありました。

(2)平和博：「平和」がテーマの博覧会

昭和9年、大正時代からの懸案だった新しい名古屋駅舎が出来始めていました。鉄筋コ

ソクリート 5 階建てという駅舎計画は、3 階建ての東京駅を追い抜いて日本一で、やはり東洋一だったのです。その頃名古屋では、名古屋港は中央ふ頭など港湾の整備が進み、仮ではありますが国際飛行場もでき、陸・海・空の玄関が揃いました。そこで市会から、博覧会を開催してほしいという全会一致の意見書が出されたのです。

市長は喜んで受けました。博覧会の開催は、開港30年、名古屋駅舎開業の昭和12年。場所は名古屋の街と港の中間の荒れた干拓地（現在の港明町）の15万坪が選ばれました。

会の名前は「汎太平洋平和博覧会」です。「汎太平洋」が対象範囲、「平和」が博覧会のテーマになるのです。10年6月の市長説明書にその理由が書かれています。「汎太平洋」は、国際博だが、15年に国が万国博を行う予定なので範囲を狭めたとあります。「平和」は、

文中に「…況んや、太平洋平和の一運動となって国際間の猜疑と排斥を洗い除き…」と、まさに国際平和を願う運動であることを謳っているのです。

昭和10年といえば満州事変の後で、世は軍国主義が強まり、軍は軍備拡張をしていました。そんな時代に、あえて「平和への一石」を投じるのは勇気のあることでした。もちろん軍の横槍は覚悟の上です。その布石でしょうか。博覧会の総裁に、親しかった皇族の陸軍中将・東久邇宮稔彦王をお願いしているのです。

12年5月。博覧会は大成功に終わりました。会期78日間に、例のない480万人を集めたのです。海外からの出品は29ヶ国。いろいろな形ではありましたが、ブラジル館など6館は独立館で、立派に我が国で初の国際博を実現しました。また心配された軍も、陸軍

の抵抗はありましたが、1千坪の国防航空館で最新の兵器等の出品があり、期間中には浜松からの航空隊の祝賀飛行もあったのです。

いかにも残念なことは、終了後1か月余で日中戦争に入ってしまう、この博覧会のテーマの意味が消えてしまったことです。しかしこの時期に、名古屋が、官民力を合わせて、「平和」をテーマにした博覧会を行ったことは、後世に語り継ぐべきことではないでしょうか。今残る平和博の遺産は、幹線道路中央に残された「平和橋」の橋柱、ただ一つになってしまいました。

(3)その他

<国際都市>

今回は名古屋市政の話が中心になりましたが、この時代も、民間

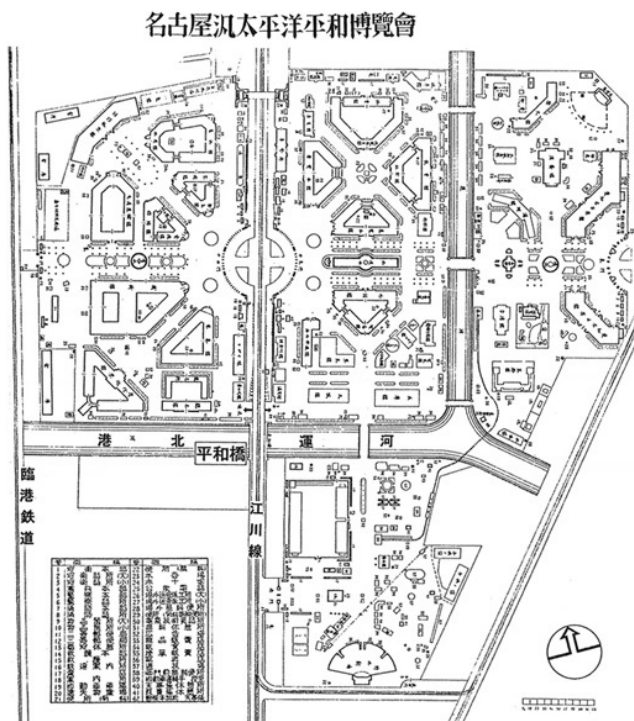


図4 平和博の会場図。50%の敷地に、41のパビリオンや、各種の展示物や遊具等が並んだ

は大変意識が高く、行動力もありました。その一つの例は、昭和2年、財界が集まる席で、商工会議所会頭の伊藤祐民が、「名古屋も国際化が進んだが、足りないものが三つある」と言って、①西洋式のホテル、②ゴルフ場、③国際飛行場をあげました。

驚くのは、②は4年に名古屋ゴルフ倶楽部和合コースとして、①は、不景気で11年にはなりましたが名古屋観光ホテルとして、いずれも民間の手で完成しています(図5)。③はそう簡単にはいきませんが、民間も加わって、9年には名古屋港に仮の国際飛行場を完成させているのです(本飛行場は16年でした)。昭和の初めの名古屋は、官民共に、世界を意識して活動していたことがわかります。



図5 財界の力でつくられた名古屋観光ホテル。
当初は広小路に面していた

3 紀行 東山動植物園

…「東洋一」のプロジェクト…

昭和12年に、「東洋一」と言われて開園した東山の動植物園を歩いてみましょう。最近「再生プラン」でリニューアルが進んでおり、昔の面影は少し減りましたが、当初の志は残されています(図6)。



図6 東山公園開園の頃(昭和12年)の地図。
当初の園内がわかる

<動物園から>

地下鉄の東山公園駅を降りて広い3番出口を出ます。外に出ると右にため池の堤防につくられた正門が見えます。門柱は当初のもので、入口の雰囲気はあまり変わっていないようです。



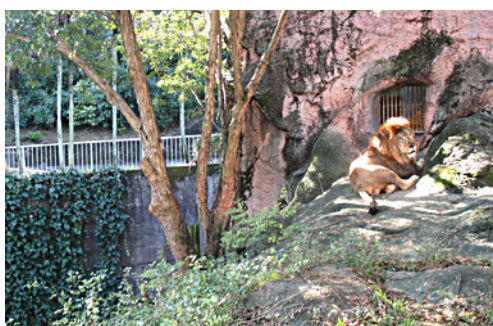
東山動植物園の正門。門柱は開園当初のもの

門を入り、まっすぐに進み、胡蝶池を渡ります。正面に丸い噴水が見えます。これも当初からのものです。その先は、園路が塞がれて、動物園のシンボル、ゾウの大きなゾウ舎「ゾージアム」が作られました。東山公園のゾウは、太平洋戦争で唯一生き残り、戦後、東京から子供たちを乗せた象列車が走ったことで有名です。



開園当初からある正門南の陶器の噴水

その辺りで、右に坂を上るとライオン舎があります。近年、中央にガラス張りで動物に接近できる施設ができていますが、当初の無柵放養方式の目玉だった施設の面影は残ります。ここも再生プランで移設が計画されていますが、施設自体は保存されるようです。



猛獣に初めて採用された無柵放養方式のライオン舎。
ライオンと観客の間に柵はない

後ろの坂を上り、トラ舎の横を進むと、左手が開けて下にコンクリート造の恐竜が三頭見えます。開園1周年を記念して古代ゾーンに設置されたもので、最近修理が終わりまし



開園1周年記念で、古代動物ゾーンに建設された
コンクリートの恐竜像



元の溜池(上池)が、公園の池として生かされた。
近年できたスカイタワーがそびえる



戦後にあったモノレール。我が国初の懸垂式の
本格派。延長される計画だったが…

た。さらに進むと、右にキリン舎、コアラ舎等が続き、上池のほとりに出ます。戦後の一時期、ウォーターシュートやモノレールがありました。先に進むと、そのモノレールの車両と施設の一部が保存してあります。我が国初の本格的な懸垂式モノレールで、都市交通の役割を持って設置されましたが、昭和38～49年の運命でした。ここまでが動物園です。
＜植物園に＞

植物園には今は連絡橋でも行けませんが、昔のようにいったん外に出て道路を渡り、植物園に入りましょう。植物園は、東邦瓦斯の寄付金をもとに設置されたものです。

入るとすぐ正面に見えるのが、水晶宮と評価され、重要文化財に指定された温室(前館)ですが、平成33年まで改修中で、今は残念ながら白い塀に覆われています。

裏の温室後館を、温室ならではの植物を見ながら通り抜けます。いくつかは開園の時から



当時の植物園の外れの奥池。正面に白川村から移築された合掌造の建物が見える

らあるもののようです。出口を出て、すぐ先で左に向かう広い道に入ります。この道の周囲は当初からの植物園です。

この道沿いにはその後、植物に合わせて武家屋敷門とか、也有園、そして池を越えて合掌造りの建物等が移築されています。この辺りまでが当初の植物園だったのではないのでしょうか。

その奥に行った所にある古窯跡を訪ねて星ヶ丘の方に抜けましょう。すぐ先で左に並行する道に移ります。少し行くと、左手に入った所に、鎌倉時代初期の登り窯の跡が残されています。戦後発見された東山古窯で唯一残った窯跡ではないのでしょうか（この連載



保存された「東山古窯H101号墳」。
瀬戸や常滑焼のルーツの古窯群の史跡

の第2回で紹介しました）。

古窯の前の道を右に行くと、水路を渡って少し広い道路に出ます。左折するとすぐ丸い広場があり、その先にトンネルがあります。くぐると星ヶ丘門です。出て右に坂を下ると地下鉄の星ヶ丘駅になります。

4 トップの気概

昭和初期、名古屋の目指したものは、国際化、東洋一でした。財界も国際都市建設に走り、議会も大都市経営の態様が整ったと語ります。大岩市長の政策も、不況をものともせず世界を目指して進んでいました。当時の意識は「三都と並称せられる」、いわば、東京、大阪と並ぶ、名古屋なのです。

その後、太平洋戦争で大きな打撃を受けた名古屋は、懸命に復興を遂げてきました。しかし戦前の名古屋の勢いまでは戻らなかったのでしょうか。戦後になってよく言われたのは三番目主義、いわば「三男坊」です。①東京にある。②大阪に出来た。だから③名古屋にもほしい、と。また、中部圏の中核都市ともいいます。これも地方の中心ということでしょう。戦後名古屋の志は、そこに安んじてしまったのです。

現在、リニア中央新幹線が工事中です。それができれば、大阪に延伸されるまでの間とはくに、名古屋は「東京と並び称せられる」都市となることのできるチャンスなのです。いまこそ、昭和の初めの大岩市長の気概に学びたいものです。

〈主な参考文献〉

①亀田忠男『大岩勇夫と大名古屋』

(2001、鈔地域問題研究所)

②『汎太平洋平和博覧会会誌 上巻』(1938、同会誌)